

共創的学習力と主体的自己形成力を育む保育者養成短期大学における体育教育の実践記録

鈴木寛康^{1, 2)}

Fostering Co-creative Learning and Proactive Self-Development in Physical Education at a Junior College for Early Childhood Educators: A Practical Report

Hiroyasu SUZUKI^{1, 2)}

本稿は、筑波大学と鹿屋体育大学による博士課程・大学体育スポーツ高度化共同専攻の必修科目として開講された2025年度「大学体育論」全10回のうち、木内敦詞教授担当の7～10回目の授業で作成したティーチング・ポートフォリオ・チャート（栗田・吉田，2021）およびその後にレポートとしてまとめたティーチング・ステートメントを整理し、教育活動記録として報告するものである。本稿では、東京都市大学FD推進センター（2020）「ティーチング・ポートフォリオ成果報告書」における都市大型ティーチング・ポートフォリオ（一般的にはティーチング・ステートメントに類型されるもの）における「はじめに、1. 責務、2. 理念、3. 方

法、4. 成果、5. 目標、おわりに」の枠組みとおおよその文字数に倣い、執筆する。以下では、ティーチング・ポートフォリオをTP、ティーチング・ポートフォリオ・チャートをTPチャートと表記する。

はじめに

筆者は現在、保育者養成短期大学の体育教師として、教養科目の体育実技・講義（免許・資格必修）から専門科目の運動遊び、健康に関する授業を担当している。本稿では、図1のTPチャートに基づき、保育者としての資質・能力の向上に貢献することをめざした筆者の教育実践を具体的に記述する。

1) 青森中央短期大学幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

2) 筑波大学大学院人間総合科学学術院および鹿屋体育大学大学院体育学研究科・大学体育スポーツ高度化共同専攻

Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, and Graduate School of Physical Education, National Institute of Sports and Fitness in Kanoya

1. 責務

筆者は主に、幼稚園教諭及び保育士養成における体育・健康分野の科目を担当しており、個人のこれまでの経験に偏ることなく、学び得た子どもの発育・発達や指導技術に関する知見に基づき、根拠を持って運動遊びや健康教育を実践する能力と他者と協働して目標を達成する能力の育成をめざしている。特に体育実技・講義では、教養科目でありながらも免許・資格必修科目でもあるため、授業内容や授業内での学生の経験と保育活動との関連に言及することで、保育者養成に資する授業となるように心がけている。特別研究（卒業研究に相当）においては、テーマ設定、方法の検討、結論の導き方の指導を通して、論理的にまとめ、伝える能力を養うことをめざしている。担当科目の多くは演習、実技形式であり、学生が積極的に話し合い、理論と実体験を結びつけて学びを深められるようにしている。

課外活動においては、高大連携事業として、高校生の高大接続に資することを目的に、「学力の3要素」を基盤とした体験授業や絵本づくり講座などを、高校側担当者と協働で企画・実施している。地域連携活動では、地域の図書館などで開催されている読み聞かせ会や本学が主催する子ども関連の公開講座などの各種活動を教育の機会と捉え、学生が参加するための交渉、企画、準備（学生指導）、実施を担当している。学内においては、「幼児体育指導者検定」と「JFA キッズリーダー養成講習会」を実施している。これらの資格はそれぞれ2日間という短期間で完結するため、資格取得という成果が必ずしも実践的な指導力の定着を意味するとは限らない。そこで、資格取得で得た知識・技術を実践的な指導力へと深化させるため、授業科目「子どもの生活と運動遊び」に各資格で学ぶ内容を取り入れ、事前・事後学習として継続的に指導している。さらに、附属幼稚園の幼児を対象として学生が指導を行う運動教室「スマイルチャ

レンジ」を、学生が専門的知識・技術を実践・応用する機会として位置付けている。サークル活動では、各種スポーツや野外活動に取り組む中で、メンタルヘルスの維持・向上や良好な人間関係の構築を図り、協働的な課題解決の経験を経て主体的な行動ができるように支援している。

2. 理念

筆者は、保育者としての専門的知識や技術を学ぶことにとどまらず、「多様な他者と協働し、目標を達成できる人になってほしい」、「学びが自身の成長につながることを実感し、自らを成長させ続けることができる人になってほしい」、「インテグリティとレジリエンスを備えた人になってほしい」といった視点から、保育の技能を高める努力ができる保育者に育ってほしいと考えている。

筆者自身は幼稚園から小学校低学年まで運動が苦手であり、運動会のかけっこでは次の組の1位と間違われるほどのビリで、友人との遊びで運動遊びになると逃げ出したくなる思いでいた。しかし、小学校高学年時の担任の先生に出会い、その先生との会話が楽しく、また頑張りを褒めてもらえることで先生についていきたいという思いが芽生え、体育や運動遊びに夢中で取り組んだ。その結果、6年生では、市の小学校体育大会で100m走の選手となることになった。この経験は、体育教師となるにあたり、学校体育において運動能力の巧拙やその向上だけに視点を向けるのではなく、子どもの気持ちに視点を向ける大切さに気づくきっかけとなった。このような経験などから、理論的に正しいことを伝えるだけでなく、子どもの気持ちに視点を向け気持ちが前向きに動くように関わることによって、子どもは積極的に活動に取り組むようになり、その結果運動での成功体験を得て自信に繋がるという今の自身の授業に向かう理念の基礎となった。また、サッカーのナショナルトレーニングセンターでのトレーニング指導の経験からは、テキストから得た専門知識やトレー

ニング技術はそのまま誰にでも有効になるわけではなく、対象者のニーズや身体的・心理的狀態によって取捨選択し工夫しなければ、成果をあげることはできないということを学んだ。

学校での学びは、ともすると暗記型、方法収集型になりがちであり、それをもって学びと解釈してしまうことが少なくない。しかしながら、保育者の仕事においては、覚えた知識や方法を目の前子ども一人ひとりあるいはクラスの特徴に合わせて、取捨選択し工夫して発信する技能が求められる。この技能を獲得することは容易なことではないが、その技能が発揮され有効に働いたときに得られる子どもたちの成功体験と笑顔は、保育者自身の努力の結果得られる最高の成果となると考えている。この成果をめざして努力できる保育者を育てたいと考えている。

3. 方法

理念で示した3つの視点に基づき、学生自らが保育技能を高める努力ができるようになる教育にしたいと考えている。そのために、以下に示す方針と具体的な方法を用いて授業に取り組んでいる。

方針1：多様な他者と協働する力

1) グループ活動を通した学び

質の高い学びを得るためには、学生が個別に努力するだけでなく、他者に対して自分の考えを発信し、他者の考えから学ぶことも有効である。さらに、学んだ内容を他者に説明するという出力の機会、学びを解釈し定着させるために有効である。そこで、担当科目全てでLITE (Learning in Teaching：ライト) (広沢，2013) という手法を取り入れている。この方法は、授業で学んだ内容をグループの学生相手に説明する、つまり「教えることで学ぶ」というものである。相手に伝わるように説明するには、学習内容を記憶するだけでなく、相手に伝わるように言葉を選び教材を選び伝える必要がある。これは、保育者として、子ども、保護者、同僚と

コミュニケーションを取る場面を想定して実施している。さらに、クラス全員の前に立ち、授業内容についてのプレゼンテーションも行っている。これにより、緊張感のある状況でも相手に伝わるように説明するという、より実践場面を想定した学びの機会としている。

体育実技では、肩を組んで円陣を組んだりハイタッチしたりすることを推奨し、良好な人間関係の心地よさを体験できるようにしている。また、集中授業としてスノーボードを採用している。90%以上が未経験で不安感や恐怖感の大きい状況で、グループの仲間と励まし合い教え合いながら難しい技術や厳しい環境に向き合い乗り越え、達成感を共有する機会としている。

方針2：学習内容を理解する力・感情に気づく力

1) リアクションノートの活用

子どものやる気を引き出し成功体験に導く保育を行うためには、活動中の心の動きを考えることが不可欠である。そこで、運動遊びⅠ・Ⅱ、保育実践と青森（健康）、体育実技において、活動中どのような感情が生じ、授業が進むにつれてどのように変化したのかをリアクションノートに記録するように指導している。さらに、自分以外の学生はどのような感情であったと考えられるかを想像することも求め、同じ活動の中で生じる多様な感情を記録するように指導している。このように体験と感情を結びつけることで、運動遊びを計画する際にどのような感情が生じ得るかを想像し、ねらいの達成に向けた工夫の足がかりになるようにしている。また、授業では一斉指導となるため、理解度に個人差が生じる。そこで、リアクションノートに感想や質問を記入することを促し必要に応じて回答を記入することで、個別に対応できるようにしている。

現在は、紙のノートからMicrosoft OneNoteに切り替えることで双方向性の向上と効率化を図っている。

2) 動画撮影機器の活用

運動遊びⅠでの鬼ごっこや雪あそびなど、人

が入り乱れて行われたり広いグラウンドで行われたりする活動を動画撮影する際に、360度カメラを使用している。これまでは通常のビデオカメラを使用してきたが、筆者自身がレンズを向けた画角に収まる状況しか記録することができなかった。360度カメラを用いることで活動全体を動画に収めることができ、活動後にPCで全体を確認した上で、フィードバックに活用できる場面を選んで学生に共有することが可能になった。

運動遊びⅡと保育実践と青森（健康）での模擬授業の実践では、子ども役が大きな声を出したり走り回ったりすることや保育者役とビデオカメラの位置が離れることで、保育者役の発言内容が聞き取りにくい動画になる。そこで、保育者役の学生にワイヤレスマイクを装着させ撮影動画に発言内容が一緒に記録されるようにすることで、模擬授業を通して保育者がどのような場面でどのような発言（関わり）をしたのかをわかりやすくして学生に共有することが可能になった。

方針3：運動技能の習得・レジリエンスの育成

1) 視聴覚教材の活用

保育者は子どもの運動遊びを展開するにあたり、個人差の大きい子どもの集団を相手に保育者の設定したねらいに向けた指導をすることになる。そのような場面を想定した実体験として、体育実技の授業においても学生一人ひとりの運動能力の個人差に合わせた指導を通して成功体験を積めるようにしている。そのために、運動学的、運動力学的視点からどのような動きになっているのか、どのように力が働いていると考えられるかを示すことは有効であると考えている。そこで、タブレット端末を用いて撮影した学生自身のスローモーション映像や、3DCGを用いた人体解剖学のアプリ、簡易的動作分析アプリを活用し、運動学的、運動力学的要素を理解できるようにしている。加えて、対象となる運動をした時に生じる感覚について問いかけ言語化させることで、実際の運動、動画

やアプリを用いた客観的視点に運動感覚を組み合わせ運動理解の促進を図っている。

2) 筆者自身の実技参加

体育実技では、運動全般あるいは運動種目により苦手な学生もいる。苦手な学生は、失敗してチームに迷惑をかけることを恐れ消極的になってしまうことや失敗して落ち込んでしまうことがある。そこで、可能な時には筆者自身もチームに入り学生と一緒に参加することで、技能の見本を強調して示したり、意図的に失敗して失敗に対する向き合い方を示したりする機会としている。それにより、保育者としても必要である果敢にチャレンジする気持ちや失敗に負けない気持ちの育成をねらっている。

3) 実技試験を通した学び

実技試験は、運動遊びⅠ、体育実技で実施している。

運動遊びⅠでは、マット運動（前転・後転・前転補助・後転補助）となっている。これは、幼児体育指導者検定の実技内容と同様のもので、見本としての正確さ、コツをわかりやすく表現する表現力、安全確保の技術を定着させるために実施している。

体育実技では、5種類の運動課題を設定している。当科目は、一般教養科目でありながらも保育士資格、幼稚園教諭二種免許取得の必修科目にもなっていることから、保育場面において運動や保育者への興味・関心を引き出すことへの活用も意図して、各種スポーツの主要な技術ではなく、コツを掴み調整力を発揮すれば成功する、ボールや用具を扱う技を採用している。例としてボール課題3種目の写真を示す（写真1, 2, 3）。これらの3課題は、授業期間中に何度でもチャレンジできることとし、成功するまで継続して取り組む課題としている。残り2種目は、床に置いたバドミントンのシャトルをラケットで拾い上げる課題（10回中5回成功）と、バドミントンコートでネットの向こう側から打ち出されたシャトルをラケットでキャッチする課題（10回中5回成功）である。この2課題

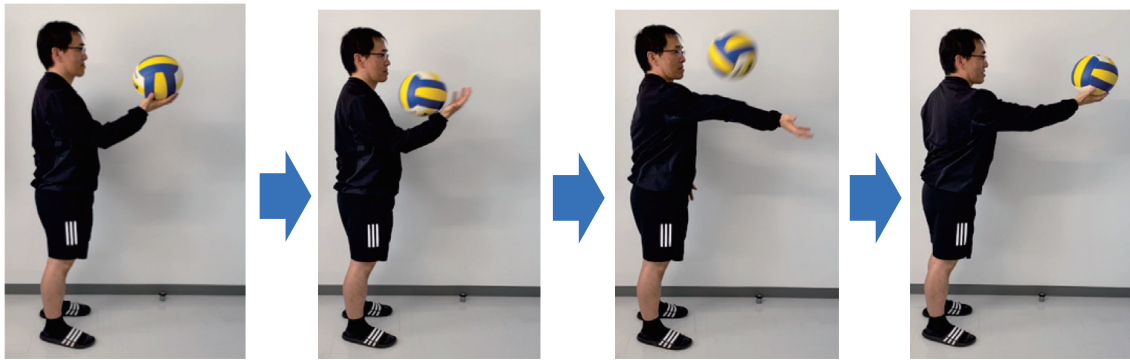


写真1 ひじボン課題

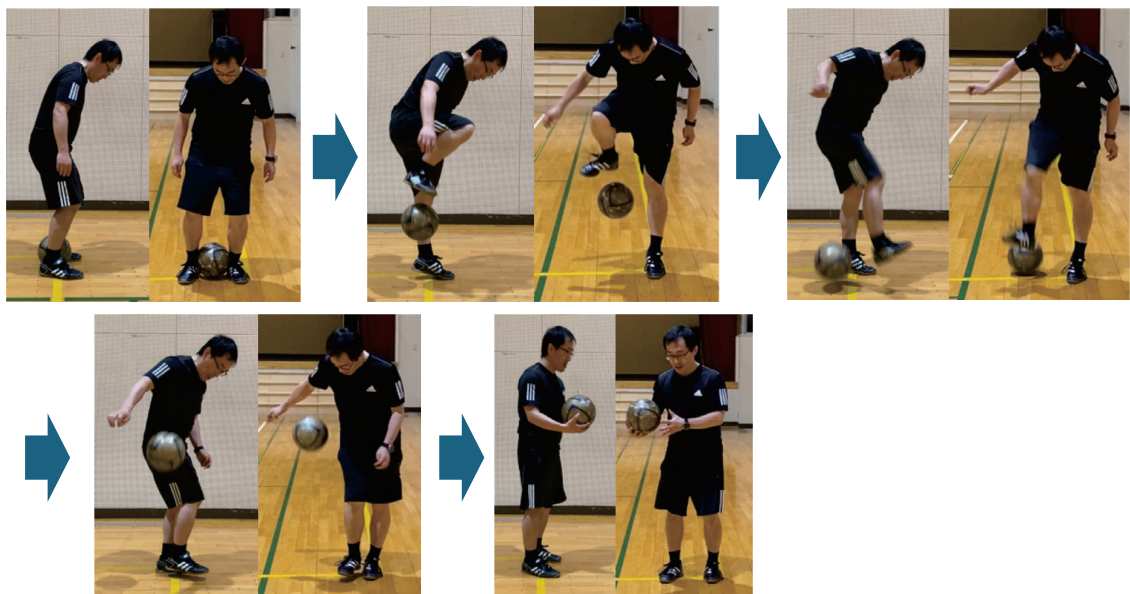


写真2 かかとボン課題



写真3 ひざボン課題

は授業最終回の時間内に同時に5人ずつ実施し、緊張する状況でも適切に運動パフォーマンスを発揮できるかを試す課題としている。

4. 成果

教育実践に対するリアクションノートの記載内容を表1に示す。各方針と方法に対して肯定的なコメントが見られたことは、保育者の資質・能力の向上に貢献することをめざした実践について一定の成果が得られたと考えている。また、筆者の研究室に所属する学生が、特別研究論文（卒業論文に相当）で準優秀賞を受賞した。論理的にまとめ、伝える能力の育成についても一部成果を得ることができたと考えている。

5. 目標

教育の責務や理念に基づき方法を選択し工夫

して教育にあたっているが、その成果は担当した学生全員にもたらされたとは言えない。そこで、短期的目標としては2025年度末までに体育教育で獲得される保育者コンピテンシーを測定する尺度を開発し、学生が獲得した保育者としての基盤的能力を可視化できるようにしたい。長期的には、筆者が担当する科目やその内容についての理解の深化に加えて、幼児教育・保育に関する現状の理解を深めること、そして、生活様式の変化や技術革新にアンテナを張り、より良い教育となるよう改善し続けることを常に意識して取り組んでいきたい。

おわりに

筆者はこれまで、所属校においてTPチャートおよび簡易型TPの作成を経験してきた。しかし、それはあくまでも個人的な振り返りで

表1 リアクションノートの記載内容

方 針	対 象	コメント
多様な他者と協働する力	LITEについて	人に説明することが苦手なので最初は嫌だなと思ったが、相手がちゃんと聞いてくれたり、伝わらなかったことを聞き返してくれて理解してくれたりしてうれしかった。
	模擬保育について	仲間と協力してやることで色々な意見が出て参考になった。 仲間が協力してくれたので、準備がスムーズだった。 色々な意見が出るので、1つに絞り込んで決めるということが大変なんだということがわかった。
	スノーボード実習について	怪我をしたらどうしようと怖くてしかなかったですが、班のみんなと声をかけ合いながら先生の教えてくれるコツを必死にやっていたら、少しずつ滑れるようになって楽しくなりました。スノーボードを趣味にしたいと思いました。
学習内容を理解する力・感情に気づく力	リアクションノートについて	後から振り返ることができるので、教育実習で指導案を書くときに自分の気持ちまで振り返って計画することができ、役立った。
	360度カメラについて	今までよりも広い範囲が見られるので、自分に見えないところでどんなことが起きていたのかを知ることができたし、360度カメラってすごいと思った。
	ワイヤレスマイクについて	今までは先生役の声がかき消されて何を言っているのかわからないことがあったので、見る気にならないこともあったけど、先生役の声がしっかり聞こえるので、たくさんの気づきがあった。
運動技能の習得・レジリエンスの育成	スローモーション映像について	自分のスマホでも撮れるので使ってみようと思う。
	3DCG解剖アプリについて	普通見ることができない体の中を見ることができ、体の作りや動きをわかりやすく見ることができた。
	簡易的動作解析アプリについて	目では分からない微妙な違いを、角度の表示で見ることができてわかりやすかった。 2つの動画を並べてみるので、違いが分かりやすかった。
	実技課題について	コツを教えてもらった瞬間成功できたので、すごいと思ったしコツを知って大事だなと思った。 仲間がアドバイスをくれたり練習に付き合ってくれたりして助けてもらった。仲間の大切さがわかった。私も人を支えられる人になりたい。
	スノーボード実習について	スノーボードがあると聞いた時から絶対できないと思ったし当日も行きたくなくてしょうがなかったですが、コツを教わりながら少しずつチャレンジしたら、午後には1度も転ばずにサイドスリップで降りてこられるようになり驚きました。何事もできないと決めつけるのではなく、チャレンジすることって大事なんだなと気付かされました。 サイドスリップは下りのエスカレーターに乗ればできると先生が言った時は全然信じていませんでしたが、今はわかる気がします。コツを知ることと例えて話すことは大事だなと思いました。

あった。今回、本稿を執筆する機会を得て、複数の大学教員の TP や文献を参考に多様な優れた事例に触れ、個人での振り返りだけでなく多様な実践の積み重ねとそれを共有することの大きな価値を再認識することができた（井上，2025；川崎，2025；木内，2021，2024，2025；高橋，2025）。本稿も多様な事例の一つとして、体育教育の発展の一部となれば幸いである。

謝辞

本 TP を作成するにあたり、懇切丁寧にご指導くださいました筑波大学・木内敦詞教授に深く感謝申し上げます。また、的確な意見と温かな支援をくださいました筑波大学人間総合科学学術院および鹿屋体育大学大学院体育学研究科・大学体育スポーツ高度化共同専攻学生のみなさまに心よりお礼申し上げます。

文献

井上 陽，スポーツを通じて人々の繋がりを深め、成長と挑戦を支える教育実践記録，大学体育研究，47，29-33，2025。
川崎百合香，誰もが楽しめる「体育」の授業実現を目指した教育実践記録，大学体育研究，47，35-39，2025。
木内敦詞，ティーチング・ポートフォリオ・

チャートの大学体育への適用：教職歴 30 年の大学教員の事例報告，大学体育研究，43，137-144，2021。

木内敦詞，誰もが全力で接戦を楽しむ大学体育ソフトボール授業の教育実践記録，大学体育研究，46，1-16，2024。

木内敦詞，大学体育教員の理念と科学と実践の統合へ：ティーチング・ポートフォリオ作成のススめ，大学体育，52（1），6-12，2025。

栗田佳代子・吉田 壘，リフレクションを可視化するティーチング・ポートフォリオ・チャート作成講座，医学書院，2021。

高橋達己，体験を通じた豊かな人生のための学びとつながりを育む大学体育実践記録，大学体育研究，47，21-28，2025。

東京都市大学 FD 推進センター，2020 年度ティチング・ポートフォリオ成果報告書（online）
<https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf>，2025.8.1。

広沢俊宗，LITE の学習効果に関する研究（Ⅱ）
一対人的積極性等の個人差変数との関係について一，教育総合研究叢書，6，35-49，2013。